

野菜



定植後の管理

野菜の定植も終わり、順調に育ちはじめていると思いますが、これから主な作物の楽しみな収穫までの大切な管理方法などについてポイントを紹介します。



- 一番目の花が咲き、生長してくると茎や葉のつけ根から芽が盛んに出てきます（わき芽という）。
- トマトは基本的には一本立てにしますので、「わき芽」は全て摘み取りましょう。
- ※実を大きくし、日当たりや風通しをよくし、病害虫の発生を少なくします。
- **支柱を立て誘引しましょう。**
竹などで支柱を立て、トマトが倒れないよう茎をひもで数回ねじり、支柱と茎の間にあそびをつけます。
- **授粉作業をしましょう。**
実をつけやすくするため、花の花粉がついてから花の房を軽く揺するか、市販のホルモン剤（トマトトーン）をスプレーで花に散布しましょう。（着果を促す効果があります。）
ホルモン剤は同じ花に2度散布しないよう注意してください。（2度かけると実が奇形になります。）



野菜
山下 伸一
下島営農指導センター
080-1729-1630

• 生育の悪い実は早めに摘み取りましょう。

一房の実の目安

大玉トマト	4～5果
中玉トマト	7～8果
ミニトマト	は摘み取りません

- **摘心（新芽を摘み取る）をします。**
支柱の高さ位に茎が伸びると5～6花房がつかますので、一番上の花房の上の葉を2枚残して摘心しましょう。
- **追肥**
肥えた土の場合は、一般的に追肥の必要はありませんが、一番目の果実がピンポン玉大になったころ化成肥料を1本に10g位をトマトの株元にまき、土に軽く混ぜます。
※一度に多く追肥をすると根が傷んだり、果実の尻腐れがでることがありますので注意してください。また石灰が不足することにより尻腐れが発生します。
- **収穫**
開花してから約50～60日で収穫できます。
家庭菜園の場合は真っ赤に色づいた時（完熟）に収穫しましょう。
※市販のトマトは多くは赤くなりはじめた時に収穫し、店頭に出るまでの間に全体が赤くなります。

果樹



4月の柑橘園管理

4月に入ると、一気に気温が上昇し、貯蔵庫内の温度も高くなります。温度、湿度管理に注意し、出荷時に腐敗果の混入が無いように注意しましょう。

柑橘では3月に十分な降雨があった為、発芽も順調に進んでいく事が予想されます。
防除・枝梢管理（着花確保）が今後の重点管理となります。樹を良く観察し、適期管理に努めましょう。

1. 河内晩柑の収穫とその後の管理

通気の良い冷暗所で予措を行い、ポリ個装を実施しましょう。また、今後は気温の上昇に伴い庫内の温度も上昇しますので、朝夕の換気に努め貯蔵管理を行いましょう。

品種名	区分	収穫時期	予措期間
河内晩柑	後期採取	4/1～4/20	7日程度(2%)

2. 病害虫防除

項目	散布時期	対象病害虫	農薬名	希釈倍数	備考
温州みかん	上旬	そうか病	デランフロアブル	1000倍	発芽3mm時
中晩柑	開花前	かいよう病	コサイド3000	2000倍	
			加用クレフノン	200倍	
全品種	開花期	アブラムシ	モスピランSL	4000倍	

※温州みかんについてはそうか病が多い園では4月の下旬に再度、デランフロアブルを1000倍で散布を行いましょう。



果樹
後藤 昇
上島営農指導センター
080-1729-1631

3. 施肥

○通常タイプ

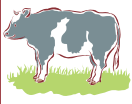
対象品種	施肥時期	肥料名	10a当たりの袋数
全品種	4月上旬	硫マグエース	2袋
早生・中熟・普通温州	4月上旬	熊本果樹肥料10-7-4 又は ひのくに果樹9-3-3	5袋
デコボン	4月上旬	熊本デコボン8-3-3	3袋

※着花が多い場合は開花2週間前までに花肥を施用（ハイヤ1号；1袋/10a当たり）

4. 葉面散布

樹勢が落ちている場合貯蔵養分の不足が考えられますので、発芽～新梢伸長期はチッ素系の葉面散布を行って下さい。また、緑化が遅れそうな場合は、マグネシウムの葉面散布を行います。

目的	薬剤名	希釈倍数	備考
樹勢回復・樹勢維持	アミノジューシーN14	500倍	いずれかをご使用下さい
	尿素	500倍	
緑化促進	神協スピリッツ	500倍	
	葉面マグ	200倍	



現在も子牛の相場は高値傾向で推移しています。一頭でも失えばその損失も大きなものになりますので、できる限り死産や流産などを無くしていくことが重要となります。そのため当JA管内では、毎年4月、5月に異常産の予防接種を実施しています。

・異常産とは

アカバネ病、アイノウイルス感染症などの、蚊（ヌカカ）を主な感染媒体とする病気により、分娩時の異常産や体型異常産子による難産が発生します。

	ウイルス流行時期	異常産発生時期	主な媒介昆虫
アカバネ病	夏～秋	夏～翌年春	・蚊（ヌカカ）
アイノウイルス感染症	夏～秋	夏～翌年春	・蚊（ヌカカ）
チュウザン病	夏～秋	秋～翌年春	・蚊（ヌカカ）

・異常産の症状について

「アカバネ病」

※流行の北限は北海道道南と言われていますが、地球温暖化により分布が拡大傾向にあり、妊娠牛が感染すると約30%の発病率で異常産を起こします。家畜伝染病予防法で届出伝染病に規定されています。

成牛⇒症状はほとんどありませんが、体型異常産子による難産が発生します。

子牛（胎内感染）⇒四肢の湾曲や脊柱湾曲あるいは斜頸などの体型異常、頭部の変形、起立不能、自力哺乳が困難な子牛等の発生が見られます。

子牛（生後感染）⇒運動失調、起立困難・不能、後肢麻痺、異常興奮等の神経症状がみられます。

妊娠牛⇒流産、死産、早産および先天性の奇形を伴った異常子牛の分娩が発生します。

「アイノウイルス感染症」

※流行の北限は近畿地方で、妊娠牛が感染すると5%未満の発病率で異常産を起こします。家畜伝染病予防法で届出伝染病に規定されています。

成牛⇒ほとんど無症状ですが、体型異常産子による難産が発生します。

子牛⇒起立不能、自力哺乳の弱い虚弱、四肢の湾曲、特に脊柱湾曲あるいは斜頸を多く示し、症状からアカバネ病と区別するのは困難です。

妊娠牛⇒流産、死産、早産および先天性の奇形を伴った異常子牛の分娩が発生します。

「チュウザン病」

※これまでの発生は九州のみで、肉用種（主に黒毛和種）で多発します。家畜伝染病予防法で届出伝染病に規定されています。

成牛⇒ほとんど無症状です。

子牛⇒起立不能、自力哺乳不能、神経症状（間欠的なてんかん様発作、四肢の屈折や回転、後弓反張、旋回運動など）を示します。

妊娠牛⇒虚弱または神経症状を伴った異常子牛の分娩が発生します。流産、死産、および早産は少なく、異常子牛の体型異常は見られません。

・今後の対策

異常産や死産を完全に無くすることは難しいですが、それぞれの飼養管理の中でできるだけ減らしていくことが大切です。毎年4月、5月に実施している親牛の異常産予防注射を接種することで、これらの病気を予防することが可能となっています。より良い経営を行うため、異常産などを無くして良い子牛の生産に努めましょう。



水田除草剤の適正使用

農薬は、あらかじめ品質・効果・残留性などが、基準によりチェックされ、問題がないと判断された薬剤が農林水産大臣の登録を受け、販売・流通しています。

水田除草剤として製品に貼付されているラベルには効果や薬害、残留性等から設定された使用基準や使用上の注意事項が記載されています。その内容を遵守して使用してください。薬剤の特長や散布方法を把握し効率よく利用し、特に散布時や散布後数日間（7日程度）の水管理には十分注意を払う必要があります。湛水状態を保つことは、安定した除草効果が得られるばかりでなく水田水系外への除草剤成分の流出を防止するためにも重要となります。

散布した除草剤の有効成分は水田土壌の表層に吸着されて除草効果を発揮します。安定した効果を得るためには、この処理層を壊さない水管理が大切です。落水や漏出を防ぎ、掛け流しを行わないようにしましょう。

また、水が少なくなり田面が露出するとその部分の除草効果が低下しますので減少分をその都度補充してください。

有効茎数の確保と中干し

除草期間が終了したら有効茎数を確保するために暖かい日中は浅水管理でげつへの促進に努めてください。1株の茎数が18本程度確保できたら中干しを行ってください。（平年では5月20日頃より）水管理を容易にするために、中干し前の土が軟らかい時に「溝切り」を行いましょ。

中間施肥 病害虫防除

中干し前に、茎を丈夫にするために珪酸加里を10㎡に20kg程度を施用してください。

補植苗は病害虫の発生要因となりますので、早めに取り除きましょう。また、畦畔の除草による耕種の防除に努めましょ。